

## エコーを有する実体的紐帯

### —現象とモナドをつなぐライプニッツの試み—

三浦 隼暉

#### 1. はじめに

本稿は、後期ライプニッツのテキスト、とりわけデ・ボス宛書簡に登場する「実体的紐帯 (vinculum substantiale)」という概念の内実を明らかにすることを目的とする。そのさい、晩年のライプニッツが用いる「エコー (echo)」という比喻に着目することで、紐帯概念それ自体がもつ哲学的な意義を明らかにする仕方で論じてゆく。本稿の具体的な問いについて、紐帯概念に関する概要と合わせて、本論に入る前に簡潔にまとめておく。

実体的紐帯の概念は、ライプニッツ哲学のうちで、大きく分けて二つの問題に関わるものとして提示されている。第一に、カトリックの聖体拝領の儀式における化体の問題へのモナドロジー的解決として紐帯概念は登場する。つまり、パンと葡萄酒とが、キリストの肉と血とにそれぞれ実体変化するという化体の議論において、モナドロジー的哲学はいかに回答することができるのか、という文脈にこの概念は見出されるのである。第二に、紐帯概念は、物体の実在性に関する問題への解決として提出されるものでもある。しばしば理解されているように、そしてライプニッツ自身も述べているように、真に実在的なものとは単純実体であり、他のあらゆるものはそこから派生的に生じてくるものにすぎない。他方、同様にまた彼自身は何度も繰り返しているように、物体が実体であるならば、つまりモナド以外にもそれ自体で実在的なものが存在するとするならば、それを実在的なものたらしめる原理が必要となるのであり、そこにこそ実体的紐帯概念が求められることになる。以上のように二つの問題系に関わるものとして論じられる紐帯概念ではあるが、どちらにせよ、複数の単純実体 (モナド) からなる複合実体の存在性格に関わるものとして論じられているという点では一致している。

このような問いをめぐって登場してくる紐帯概念は、ライプニッツによって晩年まで検討・改訂され続けた概念であった。彼が没するその年においても、紐帯概念に関する議論がデ・ボスとの間で交わされ、そうしたやり取りの中でその概

念は彫琢されつづけた。この意味で、それは結局のところ未完成な概念であったという見方もありうるかもしれないが、その一方で、ライプニッツ哲学がたどり着こうとした先を指し示すものであったとも言えよう。

紐帯概念の導入は、1712年2月15日のデ・ボス宛書簡においてのことであった。ただし、その後のデ・ボスとの往復書簡のなかで、少しずつその内実を変更してゆくこととなる。とりわけ、1713年8月23日の書簡では、自身の立場を変更することが、ライプニッツ自身によって明確に宣言されている(便宜的に、これ以前の紐帯概念を「実体的紐帯Ⅰ」、その後のそれを「実体的紐帯Ⅱ」と呼ぶことにする)<sup>1</sup>。さらに、1715年4月29日の書簡においては、「なぜなら、この実体化するものは現にモノイドから受けている変化の一つ一つをエコーとして有しているからです」(YLDB 336, 邦訳 182)と述べ、その後は紐帯概念の働きを説明するために「エコー」という概念を何度も用いるようになる。本稿では、このエコーという比喩が紐帯概念とセットになって用いられる時期が、紐帯概念が登場してすぐのことではなく、むしろ実体的紐帯Ⅱの登場以後のことであったという点に注目したい。なぜ「エコー」は実体的紐帯Ⅰではなく、紐帯Ⅱの概念とともに論じられたのか、という問いをテコにして、最終的にたどり着いた紐帯概念それ自体の意義を明らかにすることを目指す。

本稿の全体の流れは次のようである。第二節では、実体的紐帯Ⅰが関係的であるがゆえに諸モノイドへと還元可能な概念として導入されてきたことを明確にする。第三節では、実体的紐帯ⅡがⅠとは異なりそれ自体で実体的なものとして改訂されたことを確認する。第四節では、実体的紐帯Ⅱについて議論を進める中で登場してくるエコーという比喩に着目し、このエコー概念が実体的紐帯Ⅱにおいてこそ効果を発揮しうるものであったこと、そしてそこから、エコーを有しうる紐帯Ⅱという概念にたどり着いたことの意義を提示する。

## 2. 実体的紐帯Ⅰの導入：関係的な紐帯概念

実体的紐帯の概念が初めて登場することとなるテキストとして、1712年2月15日のデ・ボス宛書簡をあげることができる。このテキストでは、モノイドとしての単純実体のみならず物的実体(すなわち複合実体ないし「実体化されたもの(substantiatum)」<sup>2</sup>)を認めるとすれば、それを支える「結合的実体」が必要であることが論じられている。この結合的なものこそ、実体的紐帯として言い換えら

れるものである。こうして導入される紐帯概念は、複数のモナドをまとめあげるものであると同時に、以下で詳しく見てゆくように、いくつかの点で、諸モナドへと還元可能なものであった<sup>3</sup>という点で特徴的だといえる。

第一に、実体的紐帯 I によって生じてくる物的実体が有しているところの、第一質料や実体的形相は、紐帯によって結びつけられている諸モナドから引き出されたものであることが論じられる。ライブニッツは次のように述べている。

もし、線が点とは別のものとして措定されるように、物的実体がモナドとは別の実在的な何かであるとすれば、次のように言うべきでしょう。すなわち、物的実体はある種の結合 (Unio) に、あるいはむしろ、諸モナドに神が付加した実在的結合者 (uniens realis) に存する、そしてこれらのモナドの受動的力の結合に基づいて第一質料が生じ——この第一質料は延長と不可入性 (antitypia) を、もしくは発散と抵抗を要求する——、諸モナドのエンテレケイアの結合に基づいて実体的形相が生じる——この実体的形相は、発生したり消滅したりし得るものであり、結合が停止すれば、神が奇蹟によって保持しない限りは、消えてゆく——、と。(デ・ボス宛書簡 1712/2/15, YLDB 224, 邦訳 158)

線を単なる点の集合ではなく連続的なものとして考える場合のように、物体を離散的な諸モナドの集合ではなく真に連続的な仕方実在するものとして考えるならば、実在的結合者が求められることとなる<sup>4</sup>。ここではそれに加えて、物的実体が有する延長や不可入性といった特質、そして実体的形相とが、諸モナドに由来していることが示されている。個々のモナドが有する第一質料やエンテレケイアを結合させることで、ひとつの物体のそれへと変換する働きをしているのが、ここでの実体的紐帯 I だといえる。この意味で、物的実体が有する根源的受動的力や能動的力といったものは、諸モナドに直接由来するものであり、ただその結合という点においてのみ紐帯概念が必要とされることとなる。

第二に、こうして導入される実体的紐帯 I は、予定調和説の延長上に置かれるような、関係的概念として考えられるものであり、その意味で関係項となっている諸モナドへと還元可能な内容を有していると言える。1695 年の『実体の本性と実体相互の交渉ならびに心身の結合についての新たな説』で言われたように、実体間の結合はあくまで観念的なものであり、それぞれのモナドが個別的に展開してゆくなかで他の実体との対応によってある種の結合的事態が十分に説明され

うるという主張と連続的なものを、この時期のデ・ボス宛書簡にも読み込むことができるのである。1703年6月20日のデ・フォルダー宛書簡のなかで提示される支配-従属という概念に基づく諸モナドの統一もまた、同様の文脈で理解可能なものである。ライプニッツ自身、その支配-従属関係が、諸モナドの表象(ないし完全性)に依存するものであり、それら間の実在的な影響関係を抜きにして説明することができる<sup>5</sup>と主張している<sup>5</sup>。複合された実体をこのように諸モナドに還元して考える立場は、実体的紐帯Ⅰの説明においても引き続き用いられているとみることができる。先の引用と同一の書簡の付録において、ライプニッツは次のように述べている。

さらに、神は、一つ一つのモナドとそのモナドの様態とを考察するだけでなく、モナド相互の関係をも考察する。[...]しかしこれらの実在的な関係の他に、より完全な関係が考えられる。それによって、複数の実体から新たな実体が生起してくるのである。このことは、単なる結果でも、真で実在的な関係だけから成り立つことでもなく、さらに一種の新たな実体性、すなわち実体的紐帯を付け加えることであり、神の知性の結果であるだけでなく、神の意志の結果でもあるだろう。[...]諸モナドは一つのモナドの支配の下にあり、それによって一なる有機的身体すなわち一つの自然の機械が作られるのである。(デ・ボス宛書簡 1712/2/15, YLDB 232, 邦訳 162)

ここで述べられているように、実体的紐帯Ⅰは「より完全な関係」として定位される。普遍的な仕方であらゆるモナドの間にみることのできる調和の関係の特殊なものとして、より完全な関係が物的実体において見出されるのである。引用の最後に示されているように、そのような結合は「支配」という形でモナドの間に設定されるものであり、この支配-従属関係のうちで、物的実体という新たな実体が生じてくることとなる。以上のような関係的な概念としての実体的紐帯Ⅰは、その関係項となっている諸モナドの支持なしにはありえないものである。こうして、この点でも紐帯は諸モナドへと還元される契機を持つと考えられる。

ただし、ライプニッツ自身はこうした実体的紐帯Ⅰを「絶対的なもの(したがって実体的なもの)」(デ・ボス宛書簡 1712/2/15, YLDB 226, 邦訳 159)と呼んでいることは見逃せない。こうした規定は、実体的紐帯Ⅰを諸モナドに相対的な概念として考えようとすることに対して、一定の留保を与えることにもなるだろう。とはいえ、デ・ボス宛書簡の英訳者でもあるルークとラザフォードが「紐帯は、

実体的なものが同時に关系的なものである、という存在論的パラドクスである」(YLDB lxiv) と指摘しているように、この実体性を、モナドと同様の意味にとることは難しい。じっさい、先の引用にもあったように、諸モナドからなる実体的形相は「発生したり消滅したりし得るものである」と述べられていた。モナドがそのような生成消滅を少なくとも自然的には免れたものであるという点を想起するならば、紐帯の実体性はモナドのそれとは全く異なるはずである。そのような実体性は、あくまで「より完全な関係」の言い換えであり、フレモンが解釈するように「調和の特殊化であり物質化 (matérialisation) つまり受肉<sup>6</sup>」として理解すべきなのである。

以上のように、実体的紐帯 I とは諸モナドへと還元可能な性格を少なからず有するものであった。言い換えれば、この時点において物体的実体ないし複合実体と諸モナドとの関係は、ライプニッツ自身によって、あくまで観念論的主張を中心とする従来のモナドロジーの文脈において捉えられているといえる。つまり、物体的実体の根源的受動的力や能動的力は、あくまで諸モナドから直接に由来するものであり、諸モナドの流動とともにそうした力を結合している紐帯もまた流れ去ってしまうようなものであった。この点は、以下で見てゆく実体的紐帯 II と鋭い対比を形作ることとなる。

### 3. 実体的紐帯 II への移行：自体的に実体的な紐帯へ

1712年9月20日のデ・ボス宛書簡において、ライプニッツは自身の見解を押し進めているように思われる。ここでは、化体の問題を論じる文脈で、モナドが新たに付け加わったりそこから離れたりする場合においても複合実体は存続する、というケースについて論じられている。

しかし、現象の実在化を認めたからといってモナドを廃棄すべきだということにはならないと思います。複合実体を形相的に構成していながら、モナドが作っているのではないようなもの [実体的紐帯] が廃棄されたり代置されたりするといえれば十分であると考えます。モナドは複合実体が存続していてもそれに属したり離れたりし得るからです。(デ・ボス宛書簡 1712/9/20, YLDB 274, 邦訳 173)

実体的紐帯概念が導入された1712年2月15日のデ・ボス宛書簡では「物的実体の変更されたとしても、モナドは保存されうるものであり、それらモナドにおいて可感的現象は基礎づけられているのです」（YLDB 226, 邦訳 159）と述べられていたことに注意したい。ここでの焦点はモナドの維持にあり、物的実体を基礎づけるのはモナドだとされる。他方、この主張に対して、半年後に書かれた上の引用箇所では、モナドが離れたとしても複合実体（物的実体）が存続しうるということが述べられている<sup>7</sup>。複合実体が有している根源的受動的力や能動的力といったものが、諸モナドに直接由来しているとする実体的紐帯Ⅰに基づくならば、モナドの変更は同時に実体的紐帯そのものの変更を引き起こすことになるだろう。だが、引用箇所ではそうではない紐帯概念が提示されているのである。

ただし、ここでの紐帯概念の変更は完全なものではない。というのも、この1712年9月20日の書簡においても「単純実体は永遠ですが、実体化されたものは生成死滅し変化し得ます」（YLDB 270, 邦訳 171）と述べられている点で、先立つ書簡の立場、すなわち「魂はそれが変化するときでも同一のものであり続けるし、同じ基体が保存されますが、このようなことは物的実体の場合では異なります」（デ・ボス宛書簡 1712/2/15 YLDB 224, 邦訳 158）という立場を維持しているからである。

実体的紐帯Ⅱへの転換は、まさにこの実体的紐帯の生成死滅に関わる点において明確に示されることとなる。ライプニッツは、1713年8月23日のデ・ボス宛書簡において次のように表明している。

もし物的実体すなわちモナド以外の実体的なものが認められ、物体が単なる現象ではないということになるなら、実体的紐帯はモナドの単なる様態ではないということになるはずです。さらに、もし実体的紐帯が偶有性や様態であるとしたならば、それが複数の基体に同時に存在することはあり得ず、したがって多数のモナドに関わる実体的紐帯など実は存在しないということになってしまい、それぞれのモナドの内に他のモナドに関わる固有の様態があるだけになってしまいます。こうなれば、ふたたび、物体は単なる現象となってしまうでしょう。[...] それゆえよくよく考えた挙句、これまでの見解を変え、私は複合実体そのものも発生死滅することはないと言っても何も不都合は生じないと考えることにしました。（YLDB 318, 邦訳 178）

個別のモナドが有する様態や偶有性に依存する関係的な紐帯概念は、ここで完全に変更されることとなる。というのも、異なるモナド間に共有されるひとつの様態というのは、各モナドに固有の様態の一致以上のものではないし、同じ様態が同時に複数の実体のうちに存在することはあり得ないので、紐帯を様態として考えるのであれば、予定調和だけでも十分だということになるからである。それゆえ、もしそのような紐帯があるとすれば、その紐帯は様態や偶有性のように生成死滅するものではなく、モナド同様に同一のものであり続ける自体的に実体的なものであるとされる。

こうした実体的紐帯Ⅱへの移行は、それまでの予定調和説の延長におかれた紐帯Ⅰのみを含み込んだ哲学とは異なるものの登場を示唆している。モナドのみが実在的であり、心身結合や物的実体といったものはそうした諸モナドの結合の特殊なあり方として回収することができるという語り方から、諸モナドの結合や関係には還元されない、非還元的な実体が物的実体には必要であるとする語り方への移行をここにみることができるのである。ただし、この語り自体はあらゆる事物はモナドへと還元されるという立場を破壊するものではない。そうした語りによって上から覆い被さる形で付け加わってくるのが、実体的紐帯Ⅱの概念だといえよう。そして、そのことは観念論的・現象主義的に理解される限りでのモナドロジーに存する現象と実在の間の断絶（そうした断絶を解決する方策として、ライプニッツ自身によって「表出」という概念が持ち出されているにせよ、それは根本的には断絶のままに取り残されている）を埋めることへと結びついているのである。次節では、エコーという比喩を検討することを通して、こうした断絶を埋めるという働きをもたらすものとして、実体的紐帯Ⅱとそれが有するエコーという概念を持ち出されることを明らかにする。

#### 4. エコーを有する実体的紐帯

自体的に実体的なものとして置かれた実体的紐帯Ⅱは、単に同一性という点において実体的であるのみならず、最終的には、変化や作用の原理であるという点においても実体的な働きをすることが論じられていくことになる。そしてこのことが本稿にとってとりわけ重要なのであるが、以下で確認する議論において、紐帯はそうした変化や作用の原理を「エコー」という仕方で有している、という主張がライプニッツによって展開されるのである。とはいえ、ライプニッツ自身は、原理とエコーとを安易に結びつけることはしておらず、「エコー」が導入される以

下のテキストにおいてもまだ、両者を結び付けてはいない。デ・ボスの疑問に答える形でライプニッツは次のように述べている。

物体が実体として考えられるなら、それは諸モナドの實在的結合から結果するもの以外ではあり得ないのだから、物体が有する様態もまたそこから結果して、モナドの変化とは対応するであろうし、その限りで、一般に教えられていることも生じるのです。この實在化するもの（realisans）に対してモナドは影響関係を有していますが、實在化するものの方はモナドの諸法則を変化させることはありません。なぜなら、この實在化するものは、モナドから受けとっている様態の一つ一つを、エコーとして有しているからです。（デ・ボス宛書簡 1715/4/29, YLDB 336, 邦訳 182）

ここで述べられているように、物体が有するさまざまな様態は、實在化するもの、すなわち実体的紐帯が有するエコーから生じてくるとされる。そのエコーは「モナドから受けとっている様態の一つ一つ」に由来するものとされており、ここでライプニッツは、諸モナドの様態から直接に物体の様態が帰結するのではないと考えているように思われる。むしろ、「諸モナドの實在的結合」、これもまた実体的紐帯を指すものであるが、その結合ないし紐帯こそが「物体が有する様態」を結果させるものとして置かれているのである。

さらに、様態を結果させるものとしての紐帯の在り方にこそ、後にライプニッツは、作用の原理を見出すことになる。つまり、ここでの紐帯は、前節でみたように生成死滅せず同一であり続けるという点で実体的であるのみならず、様態に働きかける原理としての役割を担うことになるのである。こうしたことは、先の引用書簡の後に展開されるデ・ボスとライプニッツとのやりとりからも明らかになる。

上で引用した書簡への返信のなかで、デ・ボスは、そのような紐帯を作用の原理として考えることはできないと反論している。というのも、物体の様態として紐帯が有しているのは諸モナドの「エコー」にすぎず、それを実体的なものとする理由もないし、それゆえに作用の原理も紐帯には属さないと思われるからである（cf. ライプニッツ宛書簡 1715/6/30, YLDB 342）。これに対して、ライプニッツ自身はこの書簡への返信において、端的に「エコーを生じさせる物体が作用の原理なのです [...] この紐帯は複合実体の作用の原理なのです」（デ・ボス宛書簡 1715/8/19, YLDB 348, 邦訳 186）と述べる。このとき、ライプニッツは物体の様態

の基礎になるようなものである限りにおいて、それを実体として認めることができ、それゆえに紐帯を作用の原理としてみることも問題はないと考えている。このように、実体的紐帯Ⅱは、単に前節で触れたように生成死滅しないという点において実体的であるのみならず、彼にとっては、作用の原理であるという点でも実体的なものとして理解されているのである<sup>8</sup>。

こうして、ライプニッツはエコーの比喩を持ち出すことによって、実体的紐帯を単にそれ自体で同一性を維持するものとしてだけでなく、物体の変化に積極的に関わりつつ、モナドからの影響を受け取るものとして位置付けている。このようなエコーと実体的紐帯、諸モナドの間関係をベラヴァルは次のようにまとめている。

エコーという現象において、我々は次のものを有している。(1) エコーの発信者すなわち諸モナド、(2) 反射する壁すなわち紐帯、(3) エコーすなわち複合的なものの様態。エコーも壁も発信者には働きかけないのであり、従って諸モナドの独立性は保たれている。対して、エコーは発信者に依拠し、発信者の声に応じて変化するのであり、従って複合的なものの様態は諸モナドないしそれらの一時的な要請に依拠する。だが、エコーは同様に壁にも依拠し、その形態によっても変化するのであり、従って物体は紐帯に応じて自然的に様々な形象をとる。<sup>9</sup>

エコーはモナドに依拠するのみならず、同様に壁としての紐帯にも依拠しているとする解釈は、実体的紐帯という概念が実体—現象の断絶を埋める働きをしようことを示唆している。第一に、もしエコーがモナドのみに依拠するものだとすれば、物体の様態は直接的に諸モナドに結びつくこととなり、そうした意味での物的実体は実体的紐帯Ⅰによって確保されていたような予定調和の延長上に置かれるものとなる。第二に、もしエコーが紐帯のみに依拠するものであれば、それは中期ライプニッツが述べていたような身体と実体的形相（精神ないし魂）という図式と近いものとなり、モナドロジーを破壊することになってしまう<sup>10</sup>。それゆえ、モナドロジーというシステムの上で、実体—現象の間に、表出以上の結びつきを求めるならば、エコーを有する実体的紐帯概念が必要となるのである。

このような解釈に従うならば、実体的紐帯Ⅱにおいて、物的実体の本質（原始的能動的力と受動的力）と実体的紐帯を同一視するルークとラザフォードの見解は斥けられなければならない。彼らは「複合実体の本質は実体的紐帯と同一の

ものである。そこに実体的形相と第一質料、すなわち根源的能動的力と受動的力とが属している」(YLDB lxxi) と述べているが、これを受け入れるならば、ライブニッツが「エコー」(すなわちモナドに由来する力) の概念を、あえて紐帯とは異なる第三の要素として持ち出したことの理由が説明できなくなってしまう。彼らの解釈は、デ・ボス宛最後の書簡に含まれた次の一節の解釈に関わるものである。

私は質料と形相との間に中間的紐帯があるなどとは言っていません。むしろ、次のように言っているのです。複合的なものの実体的形相それ自体とスコラ哲学で言われる意味での第一質料とが、つまり原始的能動的力と原始的受動的力とが、この紐帯によって<sup>11</sup>、いわば複合的なものの本質に内在している (isti vinculo, tanquam Essentiae compositi inesse)、と。(デ・ボス宛書簡 1716/5/29, YLDB 366, 邦訳 192)

ここでは、ルークやラザフォードに反して、そしてアンフレイに従って、実体的紐帯が複合実体の本質から区別されていると考えるべきだろう。アンフレイは、彼らの解釈に対して、引用部の直前でライブニッツが「[実体的紐帯は] 複合実体の根底 (basis) にあるのです」(YLDB 366, 邦訳 191) と主張するさいの「根底」を本質と同一視するべきではなく、むしろ、紐帯は原始的能動的力や受動的力といった本質の基体として理解されるべきであるとしている<sup>12</sup>。アンフレイ自身はエコーという比喩には触れていないが、ここまで見てきたような、紐帯そのものとは区別されたエコーの概念は、彼の解釈を支持することになる。

ライブニッツのエコー概念は、諸モナドから独立して存在する基体的な紐帯概念を前提とすることで初めて意味のある概念となる。じっさい、ライブニッツがエコーという比喩を用いるのは実体的紐帯Ⅱすなわち自体的に実体的なものとしての紐帯概念が提出された後でのことなのである。諸モナドに還元可能な実体的紐帯Ⅰにおいては、物体現象とそれら単純実体との関係は直接的なものであり、その意味では諸モナドの表出によって現象を説明する従来のモナドロジーの枠内に収まるものであった。他方で、実体的紐帯Ⅱとエコーの概念は、諸モナドから独立した物体現象そのものの実在性を諸モナドへ結びつけるように働くという点で、新たな哲学的内容を含み込んでいる。言い換えれば、ここで導入される紐帯概念とは、物体現象（とりわけ生物としての現象）に見出される諸々の様態を、

エコーという形で一手に引き受ける基体であり、同時に諸モナドにその由来を求める請求者なのである。

## 5. おわりに

実体的紐帯概念の身分は、物体现象と単純実体の間で常に揺動し続けていた。実体的紐帯Ⅰが登場した時、それは、諸モナドに引き寄せられた仕方で、究極的にはそれら単純実体の関係のうちに回収されるものであり、他方で紐帯Ⅱへと変更された後では、(強い意味で実在的な) 物体的実体を支持するものとして提示されてきたのである。実は、実体的紐帯Ⅰの概念が提示される以前、1706年のデ・ボス宛書簡の中でも一度だけ「紐帯」という語を記しかけて、その書簡を送付する段になって削除したという事実があった。そこでの表現は興味深いものである。「現象が我々に示している連続的なものの紐帯 (*vinculum continui quod phaenomena nobis exhibent*)」(YLDB 22) という仕方で述べられたこの紐帯は、紐帯概念の出自が、単にモナドから複合実体を合成するためという以上に、連続的なものとして現前している現象を救うために持ち出されたものであったことを示唆している<sup>13</sup>。

本稿で述べてきたようなエコー概念の登場は、観念論的・現象主義的傾向の強い後期ライプニッツ哲学の大きな転換点になっていると言ってもよいだろう。実体的紐帯Ⅱとそれが有するエコーは、単に現象的・経験的に与えられた物体现象の実在性を主張するにとどまるものではない。言い換えれば、ここで生じているのは〈モナドのみを实在とする観念論〉から〈物体をも实在とする实在論〉への転換、あるいはそれらの間の排他的選言のようなものではない<sup>14</sup>。そうではなくて、そうした主張が前提とする現象—実体図式を乗り越えて、エコーとそれを反射する紐帯とによって、物体现象と諸モナドの間の形而上学的で実在的な関係をも含み込んだ新たな实在論的哲学の構想こそ、最終的にライプニッツが辿りついた哲学だったのである<sup>15</sup>。

<sup>1</sup> 本稿は、実体的紐帯Ⅱという概念の内実を明らかにすることを目指すものであるがゆえに、この紐帯概念の変容を主題としては扱わない。しかし、そもそもなぜ実体的紐帯ⅠとⅡという異なる概念が登場してきたのか、そして両者はライプニッツ哲学の中で両立可能なものであったのかという問いは、重要である。この点については以前の論文において詳細に論じた。その要点は以下のようなものである。「紐帯をめぐるふたつの問い、すなわち (1) いかにして単純実体が

ら複合実体が合成されるのか、(2) 経験的所与としての複合実体を可能にしている条件とは何か、という問いはそれぞれ実体的紐帯 I と実体的紐帯 II に対応するものとして理解することができる。[...] これらの紐帯概念は、それ自体としては両立不可能なものであるが、異なる問いにおいて論じられる限りにおいては、ライプニッツ哲学の全体的プロジェクトのうちで両立可能なものであるといえよう」（三浦隼暉「経験からの要求と実体的紐帯——後期ライプニッツにおける複合実体の問題——」『哲学雑誌』135[808], 2021, p. 260）

<sup>2</sup> 物的実体は複合的であるがゆえに単純実体であるモナドからは区別される。それゆえ、端的に「実体 (substantia)」ではなく、「実体化されたもの (substantiatum)」として語られることになる。とはいえ、単純と複合という構成上の差異はあるものの、両者ともに「それ自体で一 (unum per se)」という在り方で存在するという点においては共通しているということも重要であろう (cf. デ・ボス宛書簡 1712/9/20, YLDB 272)。

<sup>3</sup> ここで、実体的紐帯が諸モナドへ還元可能というのは、紐帯が諸モナドなしには成立し得ない関係的なものである、ということを目指す。こうした事態は、紐帯が諸モナドの共通様態であるという事態とは区別して考えるべきであろう。というのも、ライプニッツ自身が関係的であることと様態的であることを区別し、前者の議論において紐帯概念を提示しているからである。「さらに、神は、一つ一つのモナドとそのモナドの様態とを考察するだけではなく、モナド相互の関係をも考察する。ここに関係の実在性と真理の実在性とが存する」（デ・ボス宛書簡 1712/2/15 付録, YLDB 232, 邦訳 162）。また、この箇所は、草稿時点では別の文章であった。「[...] モナドの様態とを考察するだけではなく、それらモナドから生じてくる一なるもの (unum) をも考察する。このひとつのものの現象において複合物体の本性 [ないし実体] が存する」（YLDB 438n14）。草稿時点で既に、「実体 substantia」が消され「本性 natura」に置き換えられていたということもルークとラザフォードによって指摘されており、この点も興味深い。だがそれ以上に本稿にとって重要なのは、「関係」ではなく「一なるもの」という仕方で語られていたこと、そして、それを削除してライプニッツがあえて「関係」という語を導入したという事実である。このことから、ライプニッツは様態ではなく、あくまで関係を考察対象としたことが明らかになる。

<sup>4</sup> 線と点についてライプニッツは次のように述べている。「連続体は無限に分割可能です。このことは、直線やそれから成るものについても当てはまります。それらの部分は全体に似ています。そして、全体が分割可能であるならば、その部分も分割可能ですし、部分のどの部分も同様です。点は、連続体の部分ではなく、むしろ端であり、一の最小分数がないように線の最小部分もありません」（デ・ボス宛書簡 1706/2/14, YLDB 20）。こうして、線が端としての点からは別に置かれるように、物的実体もモナドとは別に考えられるべきだと、ライプニッツは考えるのである。

<sup>5</sup> 「モナド相互の支配と従属は、モナドそのものにおいて考えるならば、表象 (perceptio) の程度の違いでしかありません」（デ・ボス宛書簡 1712/6/16, YLDB 256, 邦訳 167）。なお、グプハルト版では「完全性 (perfectio) とあり邦訳もそれに従っているが、本稿ではデュタン版と YLDB に従い「表象 (perceptio)」として訳出している。

<sup>6</sup> Frémont, C., *L'être et la relation*, J. Vrin, 1981, p. 55.

<sup>7</sup> 最終的にライプニッツはこの両方の主張を認めることとなる。「諸モナドも、複合実体の諸部分も複合実体の全体的本質とはなっていないので、それゆえ、モナドや他の構成要素がそのままでありながら、物的実体が除去されるということもあり得るし、その逆もあり得ることなのです」（デ・ボス宛書簡 1716/5/29, YLDB 368, 邦訳 194）。

<sup>8</sup> 山口は実体的紐帯が作用の原理を有する点について批判的に検討し「実のところ〈実体的紐帯〉には或るものを正にそのものたらしめるような力などはない、従って〈実体的紐帯〉を作用の原理だとするのはおかしいのではないか、という帰結に陥るように思われるのである」（山口裕人「複合実体と「エコー」——〈実体的紐帯〉を巡る一考察」『メタフュシカ』37, 2006, p. 46）。

たしかに「或るものを正にそのものたらしめるような力」という意味では実体的紐帯は作用の原理ではあり得ないように思われる。しかし、諸モナドの力を一度引き受けて、物体的実体へと伝えるというさいに、基礎ないし基体として働くという意味においては、物体現象に現れてくる様態の原理は実体的紐帯に求められるということができる。さらに、基礎ないし基体としての紐帯の在り方についてライブニッツは次のようにも述べている。「しかし、次のようなものが私の実体的紐帯と異なるならば、私はどのような仕方ですそれが説明されうるのか分かりません。そうした実体的紐帯は、たしかに基体において存するものではありませんが、偶有性としてではなく、むしろスコラで言う実体的形相として、ないしは様態の源泉 (*fons modificationum*) として、もちろんエコーという在り方で、存しています」(デ・ボス宛書簡 1715/8/19, YLDB 350, 邦訳 187)。ここでは、紐帯がエコーという仕方です「様態の源泉」として働くことが示されている。こうした様態の源泉であるという意味において、ライブニッツは、紐帯を「作用の原理」として捉えようとしていたと考えられる。

<sup>9</sup> Belaval, Y., *Leibniz: initiation à sa philosophie*, 6<sup>e</sup> édition [1<sup>er</sup> éd. 1952], J. Vrin, 2005, p. 248. エコーは諸モナドに依拠するというベラヴァルの解釈に対して、エコーは諸モナドに依拠しているわけではないとする次のテキストがある。「諸モナドのエコーは、その成り立ちからして、一旦指定されるや諸モナドを要求します。しかしそれらに依拠しているわけではありません。魂も外的なものエコーです。しかしそれも外的なものからは独立しています」(デ・ボス宛書簡 1716/5/29, YLDB 368, 邦訳 194)。とはいえ、ベラヴァルは、エコーが諸モナドに依拠するだけでなく、紐帯にも同様に依拠していると考えている。言い換えれば、ベラヴァルが述べているのは、エコーの部分的な諸モナドへの依拠という事態である。これに対して、ライブニッツのテキストは、エコーが全面的に諸モナドに依拠している事態を否定していると解釈することができ、この意味でベラヴァルの解釈とは矛盾しないと思われる。

<sup>10</sup> エコーがモナドに依拠しないとすると、諸モナドが紐帯に結びつく道が閉ざされてしまう。それは以下のような問題も引き起こすことになるだろう。「もし実在的な紐帯が可能であるなら、それによって結合されたものが紐帯に影響を与え得るものでなければなりません。そうでなければ、それが、結合されたものの紐帯だと言えなくなってしまいます」(デ・ボス宛書簡 1715/4/29, YLDB 336, 邦訳 183)。

<sup>11</sup> ここで « *isti vinculo* » は「行為者の与格」として訳出している。ルークとラザフォードはこの箇所を “*belongs (in esse) to that bond, as the essence of the composite*” として英訳している (cf. YLDB 367)。これに対して、アンフレイはこの英訳がミスリーディングであるとして、“*belong (in esse) to the essence of the composite so to speak, in virtue of this bond*” として訳し直している。また、Dutens 版によれば « *etsi vinculo* » として翻刻されており (cf. Dutens II.1, 318)、これに従うとしても「紐帯によってではあるが」という仕方です、やはり「複合的なものの本質」と「紐帯」とを同一視するべきではないだろう。

<sup>12</sup> Cf. Anfray, J.-P. (2020), “The unity of composite substance: the scholastic background to the *Vinculum Substantiale* in Leibniz’s Correspondence with Des Bosses,” *VIVARIUM* 58, pp. 249–250.

<sup>13</sup> この見解は最晩年の次のテキストの主張にまで通じている。「実在的な連続性は実体的紐帯によってのみ生じ得るのです」(デ・ボス宛書簡 1716/5/29, YLDB 370, 邦訳 194)。

<sup>14</sup> ハルツは、ライブニッツ哲学に関して、観念論を「宇宙において精神と精神に依拠した対象とのみが存在する」と考える立場であり、實在論を「宇宙において精神でも精神に依拠するものでもない少なくともひとつの対象が存在する」と考える立場であるとしている (cf. Hartz, G. A., *Leibniz’s Final System: Monads, Matter and Animals*, Routledge, 2007, p. 6)。また、ロビネはこうした二つの傾向、すなわち「宇宙を構成している実在的な単純実体に対して、物体は適合した現象でしかない」とする主張と、「複合的な実体に依拠する物体に関する言説」とが、ライブニッツ哲学のうちには選言的に存していると述べている (cf. Robinet, A., *Architectonique disjonctive automates systémiques et idéalité transcendante dans l’œuvre de G. W. Leibniz*, J. Vrin, 1986, p. 13)。

<sup>15</sup> 本稿は日本学術振興会科学研究費補助金(課題番号20J12083「後期ライプニッツにおける有機体論を基軸とした物的実体に関する実在論的研究」)による研究成果の一部である。

#### 凡例

文献表の丸括弧内は略号。ライプニッツのテキストからの引用に関しては、『ライプニッツ著作集』(工作舎)第1期および第2期に邦訳が収録されている場合、それらを参照し一部変更した。Leibniz, G. W., 『ライプニッツ著作集』全10巻, 下村寅太郎・山本信・中村幸四郎・原亨吾(監修), 工作舎, 1988-1999.

—— *The Yale Leibniz: The Leibniz-Des Bosses Correspondence*, Transl. by B. C. Look and D. Rutherford, Yale University Press, 2007. [略号 YLDB]

#### 参考文献

Anfray, J.-P., “The unity of composite substance: the scholastic background to the Vinculum Substantiale in Leibniz’s Correspondence with Des Bosses,” *VIVARIUM* 58, 2020, pp. 219–252.

Belaval, Y., *Leibniz: initiation à sa philosophie*, 6<sup>e</sup> édition [1<sup>er</sup> éd. 1952], J. Vrin, 2005

Fremont, C., *L’être et la relation*, J. Vrin, 1981.

Hartz, G. A., *Leibniz’s Final System: Monads, Matter and Animals*, Routledge, 2007

Robinet, A., *Architectonique disjonctive automates systémiques et idéalité transcendantale dans l’œuvre de G. W. Leibniz*, J. Vrin, 1986.

三浦隼暉「経験からの要求と実体的紐帯——後期ライプニッツにおける複合実体の問題——」『哲学雑誌』135[808], 2021, pp. 247–266.

山口裕人「複合実体と「エコー」——〈実体的紐帯〉を巡る一考察」『メタフュシカ』37, 2006, pp. 41–54.